

CTHULHU

その日、私はとあるサラリーマンの行動を監視していた。

浮気の疑いがある、とその男の妻から調査を依頼されたのだ。

男は外回りの営業の合間にホテルで女子大生と密会していた。二人が肩を並べてホテルへ入っていく後姿を、私はすでに写真に収めていた。

そのことは電話で報告した。依頼者は夫の行動を逐一知らせるようにと望んでいた。さらに決定的な証拠とするために、二人を正面から捉えたショットも欲しいという。そのため、こうしてホテルの入口近くに停めた車の中で、スポーツ新聞の下にカメラを隠し、じっと待っているのだった。

くだらない仕事だ。だが探偵稼業とはこうしたものなのだ。

そこは浜松町の駅から海側に少し行った所にある〈ハーレム〉という小さなラブホテルで、屋上に大きな自由の女神像がそびえ立っているのが特徴だった。右手に掲げたかがり火の部分にはストロボライトが仕込まれていて、定期的にぴかぴかと光っていた。

時刻は、午後四時十五分。

二人がホテルに入ってそろそろ一時間が経つ。

十一月の終わりにしては暖かい日だった。なんだか眠くなってきた。うっかりすると居眠りをしてしまいそうだった。私は十秒ほど目を閉じてハンドルに頭をもたれさせてから、眠気をはらうように頭を左右に振った。

あらためてホテルの方に目を向けると、そこへ奇妙な車があらわれた。ボディがピンク色のライトバンで後部の荷台は銀色のコンテナのようになっていた。それもただのコンテナではなく、派手な寺院のような屋根がついている。

ピンクのライトバンは急ブレーキでホテルの前に止まった。ドアが開き運転席から降り立ったのは、髪の長い女だった。服は着ていなかった。つまり裸だ。

彼女は自分が全裸であることなどまるで気にする様子も見せず、屋上の自由の女神像を見上げていた。そして悠然とホテルに入っていった。

「な、何なんだ、あれは……!？」

新車の露出狂だろうか……それにしても、あの車は？

車をよく観察してみると、それが車体をピンクに塗り替えた霊柩車であることに気づいた。棺桶を収める寺院風の荷台が銀色のペンキで塗り固められているのだ。

霊柩車に乗った露出狂？ ますますわけがわからない。

しばらくすると女がホテルから出てきた。あいかわらず裸だ。肌は白く、かすかに緑がかかった色に見えた。女はピンクの霊柩車に乗り込むと、すぐに走り去った。

いっそのこと浮気調査など投げ出してあの女を尾けようか。本気でそう思ったわけではないが、何気なくエンジンのキイに手をかけた。その途端、頭上で何かが光った。

爆音とともに、車が激しい衝撃で揺れた。

私は思わず身をすくめ、頭を抱えた。

衝撃はすぐに治まった。

車から頭を出して空を見上げた。

「うわあああっ！」私は叫び声を上げた。

ホテル屋上の自由の女神像がこちらに倒れかかってきていたのだ。

女神像は足の部分が砕け、そこから折れて落下してきた。

幸いにも、女神像は車を直撃することはなく、手前の路上で砕け散った。

身長5メートルほどもあるコンクリートの塊である。目の前で見ると異様に大きく見える。

通行人はいなかったのだから怪我人はなくて済んだ。周囲に人が集まってきた。ホテルの従業員らしい若い男も姿を見せ、啞然としていた。

私は車を降り、その男の腕をつかんで訊ねた。

「あの女は何をしたんだ？」

「えっ、女って？」

「今出て行った裸の女だよ」

「裸の？」

「君はフロントにいたんじゃないのか？」

「ええ、フロントにいましたけど、誰も出入りしてませんよ。三十分ぐらい一人も……」

男の腕を放し、私は車に戻った。

スカイライン GT のエンジンをかける。もう浮気調査どころではなかった。

あの女は爆弾テロリストだったのだろうか？

だとしてもなぜ、自由の女神像が標的に？

なぜ、霊柩車で？

なぜ、裸で？

あの女を追わなければならない。これこそ探偵の仕事だ。報酬は出ないかもしれないが……。

車を出そうとしたところ、開けてあったサイドウィンドウから、誰かが腕を突っ込んできた。その手には拳銃が握られていた。ブローニング・ハイパワーだ。

こちらがそれを認識するのを待っていたようなタイミングで、銃口が私のこめかみに突きつけられた。

「車を貸せ」男が言った。

「いやだ」

「撃つぞ、脳が吹っ飛ぶ」

「待て。車を汚したくない」

「三つ数える」

「待て、待て。この車いろいろデリケートで他人の運転じゃ、まともに走らないんだ。あんたが助手席に乗るならどこでも連れてってやるよ」

「よし、それで手を打とう。キイを抜いてこっちに渡せ」

私はエンジンを切ってキイを男に差し出した。まるでゴリラのような大きな男だった。

大男は体を丸めるようにして助手席に乗り込んできた。キイを受け取ってエンジンを再始動させる。

「どこへ行くんだ？」

「とりあえず北だ。スピードを出せ」

私は海岸通りへ出て可能な限りの速度で車を走らせた。

「で、目的地は？」

大男は答えようとせず質問を返した。

「お前、俺のキャデラックを見たか？」

「さあな」

「ピンクのキャデラックだ」

「もしかして、あの霊柩車のことか？」

「あれは霊柩車じゃないんだよ」

「じゃあ何だ？」

「……とにかく、俺のキャデラックだ」

「あの霊柩車を追えばいいのか？」

「霊柩車じゃないって言っただろ」

「ああ、キャデラックね」

「そうだ。キャデラックを追うんだ。……ところでお前、なぜあのホテルを監視してた？」

「それが仕事だからさ」

「何の仕事だ？」

「私立探偵。浮気調査だよ」

「名前は？」

「一条寺蓮」

「レンか……。俺はビリー・ラングレンだ」

「は、何でガイジンみたいな名前なんだ？」

「日本人じゃないからさ」

そう言われて顔を見ると、たしかに東南アジア系か、南米系か、とにかくエスニックな顔立ちだった。

「日本語ぺらぺらじゃないか？」

「親父が貿易商で、ガキのころから一年中太平洋をぐるぐるまわってた。それでどこの言葉でも自然と憶えちまったんだ」

「仕事は？」

「自動車泥棒だ」

「で、今はあの霊柩車を追ってるわけか？」

「霊柩車じゃない、キャデラックだ」

「裸の女が運転するキャデラックか」

「あの女を見たのか？」

「ああ」

「そうか、見たのか……」

「何者なんだあれは？」

「精霊だ……。キャデラックの精霊なんだ」

「は、それが何で自由の女神を爆破するんだ？」

「あの女神像はな、ある組織の通信施設が偽装されたものだった。敵の動きを牽制するために破壊する必要があったんだ」

「ある組織って何だ、敵って？」

「ま、いろいろさ」大男はもう質問に答える気はないようだった。

私は彼の指示するとおりに運転した。車は隅田川を越え、足立区に入っていた。

荒川の手前で街道が封鎖されていた。路上には小型だが頑丈そうなバリケードが並べられ、警官とも警備員とも違う、見慣れない黒いコートを着た男が誘導棒を振って車を迂回させていた。

スカイラインを脇道へ入れるとラングレンが言った。

「この先だ」

「どうするんだ？」

「裏道から何とか封鎖の向うへ出れないか」

「やってみよう」

そのあたりは迷路のように細道が連なっていた。しばらく走ると、一方通行を逆走すれば街道に出られる小径を見つけた。街道に出る直前で車を停めた。

橋へ向かう上り坂に入るあたりに、あのピンクの霊柩車が停められているのが見えた。十人ほどの黒い服の男たちが等間隔に円を描いて取り囲んでいた。皆、スコープだかランチャーだかをゴテゴテと取り付けた改造型の M16 突撃銃を霊柩車に向けていた。よく見ると白人が二人と黒人が一人混じっている。他の連中も一見日本人に見えるが、あるいは日系人か他のアジア系なのかもしれない。黒服たちはじわじわと円を狭めるように接近してくところだった。

「ここでいい」ラングレンはそう言って車を降りようとした。

「おい、待てよ」

「お前は帰っていいぞ」

「ここまで来てそりゃないぜ。見物ぐらいさせてもらう」

「命の保障はできないぞ」

「毎度のことだ」

「勝手にしろ」

ラングレンは一度去りかけてから車内に戻り早口に告げた。「迷惑をかけた埋め合わせに一つ教えてやる。《新国家協会》だ」

「何だ、それは？」

「新しい国家の協会、チャーチじゃなくてアソシエーションの方な」

「それがどうした？」

「調べてみる。いいネタがあったら俺が買い取ってやる」

「どうやってあんたに連絡する？」

「データ・ジャック・ビリーというのが俺の会社だ。調べればわかる」

ラングレンは車を降り、道路脇の植え込みに隠れるようにしながら霊柩車に近づいていった。

黒服の男たちはキャデラックまで1メートルほどにまで接近していた。

その時、鞭を叩きつけるような音とともに霊柩車の荷台から閃光が走った。

車体から四方八方に伸びた稲妻に捕らえられ、武装した男たちは一瞬のうちに全員地面に倒れていた。

ビリー・ラングレンがキャデラックに駆け寄っていった。近づくと彼を迎え入れるように助手席のドアが開けられた。大男が中へ飛び込むと霊柩車は走り出した。スピードを上げ橋を渡っていく。

私は後を追おうとした。だが、スカイラインはいつの間にかエンストしていた。キイを回してもまったく反応しない。

背後から低空を飛ぶヘリコプターの爆音が聞こえてきた。すぐに頭上を越えて霊柩車を追跡していった。それは普通のヘリコプターではなかった。機体の左右にローターを持ち、それを前方に向けて飛行していた。

「あれは……、オスプレイじゃないか。いいのかこんなところを飛んで」

空はブルーからオレンジへとグラデーションを成した夕焼けだった。

霊柩車はもう橋を越えようとしていた。地表を滑るようなスピードを出して、すぐに見えなくなった。やがてオスプレイの機影も視界から消えた。

路上では黒いフォードの SUV が現れ、倒れた男たちを白い防護服の者たちが回収していた。

私はもう一度エンジンのキイを回した。今度は素直にかかった。

2.

夜。事務所兼住居に帰り着くと、私はまず浮気調査の依頼人へ提出する報告書を仕上げた。

ホテルに入るまでは対象を尾行したが、その後、自由の女神倒壊の混乱で見失ってしまったことにすれ
ばいい。

女神像倒壊事件は、テレビのニュースでも流れていたが、扱いは小さかった。爆破については触れられ
ず、手抜き工事が原因で台座の強度に問題があったというのが警察の見解だった。

ビリー・ラングレンによれば、あの女神像はどこかの組織の通信施設が偽装されたものだったという。そ
れが本当なら、現場検証をした警察も何らかの痕跡を発見したはずだが、公式発表を控えさせるような力
が働いたのだろうか。

パソコンで“新国家協会”という語を検索してみる。

とくに情報はなく、そのような名称の組織が存在するのかどうかもわからなかった。

つぎに“data jack billy”と打ち込んで検索する。

するとフェイスブックにアカウントがあることがわかった。開いてみると英文だが、どうやら日本や東
南アジア各国で外国のメディアが取材などを行なう際の現地ガイドのようなことをやっているらしいこと
がわかった。

まともな仕事のようなのだが、文章だけなら何とでも書ける。あの男が拳銃で私の車を強奪しようとした
事実を考えれば、彼自身が言った自動車泥棒の方が実態に近いのではないか。

ともかく連絡先はわかった。《新国家協会》について何か情報があれば、あの男が買い取るということだ
が、どうするか。それも米軍に捕らえられていなければの話だが。

とりあえず知り合いの情報源に電話してみることにする。夜も遅くなってきていたが、相手は夜のほう
が連絡しやすいというタイプだった。

「知らんなあ」と情報源は言った。「聞いたこともない。だが、何か気になるな。よしっ、こっちで調べてみ
るよ」

「頼む」私はといって私は電話を切った。

翌朝、パソコンを立ち上げると、情報源からメールが届いていた。

文面は次のとおり。

《新国家協会》について情報を提供できるという人物を見つけた。

しかし正体不明なので接触するなら十分用心したほうがいい。

そのあとに携帯電話の番号が記されていた。

私はその番号を呼び出した。

相手はすぐに出た。

「もしもし」低く、聞き取りづらい声だった。

「もしもし、あ、こちら一条寺という者ですが」

「こちらはトカゲです」

「えっ、トカゲ!?!」

「ええ、トカゲです」

「いや失礼。《新国家協会》について何かご存知だとか？」

「ええ、よく知っていますよ」

「そのことについてお話を聞かせてもらえないでしょうか？」

「いいですよ」

「では、お会いできますか。いつなら都合がいいですか？」

「できるだけ早くお会いしたい」

「そうですか。場所は……？」

「こちらから伺います」

「それは悪いな。こちらから行きますよ」

「いや、こちらから伺います。住所を教えてください」

できれば外で会いたかったが、かたくなに言いはられては仕方がない。私は事務所の住所を告げて電話を切った。

情報源は用心しろ書いていたが、まさか何も調べないうちから手荒なまねはされないだろう、と私は思っていた。

三十分もたたないうちにインターフォンが鳴った。

低く、くぐもった声がスピーカーから聞こえた。

「トカゲです」

ドアを開けると痩せた長身の男が立っていた。ギョ口目で頬はこけている。血色の悪い土気色の肌をしていた。灰色の詰襟の服を着て、右腕にコートをかけていた。その右手には拳銃が握られていた。スタームルガー・ブラックホーク。西部劇に出てくるような無骨な黒いリボルバーである。

銃口が私の左胸を狙っていた。

「さがって、手を上げてください」

私は三歩ほど後ろにさがり、両手を上げた。

長身の男が事務所に入り、背後でドアが閉まった。私が武器を持っていないことを確かめてから言った。

「一緒に来てもらいましょうか」

「どこへだ？」

「お望みどおり《新国家協会》へご案内するんですよ」

「いや、話を聞かせてくれるだけでいいんだが……」

「ご一緒していただければ、いくらでもお話します」

「わかった。ついて行くから、その銃を引っこめてくれないか」

男は黙って、銃身の動きで外へ出ろと指示した。

「わかった。戸締りぐらいさせてくれ」

「どうぞ」

私は明りを消し、部屋を出て鍵をかけた。

男は私を先に立たせ階段を下った。拳銃はコートの下に隠していた。

ビルの外にSクラスの白いメルセデス・ベンツが止められていた。二世代ぐらい前の型だが新車のように輝いていた。

銃口が私を後部ドアへ導いた。ドアを開け、乗りこもうと頭を下げると、尻を蹴飛ばされ、私は後部座席の床に横たわった。

男が手錠を投げてよこした。

「それを背中ではめてください」

私は指示に従った。男は手錠が完全にかかっていることを確かめると、黒い巾着袋で私の頭部をすっきり覆った。

「そう遠くはありません。しばらく辛抱してください」

ドアが閉められ、メルセデスは静かに走り出した。

どれくらい時間が経っただろうか。三十分、四十分、あるいは一時間か、それ以上は経っていないはずだ。

工事現場の近くを二度通り、踏み切りで一度待たされ、長い昇り坂を上ったが下ってはいない。最後に未舗装の地面をしばらく走り、ふたたび平坦な場所へ出て停止した。運転席のドアが開き、男はどこかへ歩み去っていた。

しばらくして足音が近づいてきた。ドアが開けられ、私は体を引き起こされた。

「こちらへどうぞ」トカゲが言った。

私は顔を袋で覆われたまま歩かされた。階段を昇り、鉄のドアをくぐったところで椅子に座らされた。両手は手錠のまま背もたれの後に回された。

「よろしい、目隠しを取りたまえ」別の声があった。

顔にかけられた袋が取り去られた。

目の前に頭の禿げた卵形の顔をした、太った男が立っていた。茶色のスーツを着て太い首にネクタイをきっちり締めていた。

「あんたは？」私は訊ねた。

「この方は、ドクター・イド。《新国家協会》の代表である」背後からトカゲが言った。

周囲を見渡すと、そこはかなり広い空間で大きな機械がいくつも並べられていた。電気コードが垂れ下がり、がらくたが散らばっているところを見ると、ここは廃工場の中らしい。

「俺をどうする気だ？」

「フッフッフ」ドクター・イドは含み笑いをして言った。「それは君の出方しただいよ」

「俺が何をしたって言うんだ」

「君はわれわれに関心を持ったではないか」

「ただ関心を持ったというだけでこの扱いか？」

「ただの関心ではあるまい。昨日君は、われわれの特殊通信センターを監視していた」

「何だそれは……、あのラブホテルのことか」

「そうだよ、私立探偵一条寺蓮くん。監視カメラが君のスカ G をしっかり捉えているんだからね」

「それは、浮気調査であのホテルの利用者を張っていただけだ」

「フン、とぼけるのは止めたまえ。君はその後、ビリー・ラングレンと行動をともにしていたではないか」

「あれは、銃で脅されてやむなく……」

「そんな言い訳が通用すると思っているのかね」

「本当だ」

「本当のことを言いたまえ」

「何を言えというんだ？」

「君のバックには誰がいる？」

「バックなどいない」

「君に指令を与えているのはどこの組織だ？」

「そんなものはない」

「あの《物体》はどこにある？」

「物体……何のことだ？」

「トカゲ、やれ」ドクター・イドは顎を上げ背後の男に指示をした。

トカゲは私のみぞおちを殴りつけた。

「うっ……くふっ……」

「苦しいかね一条寺くん。私は乱暴なことはしたくないんだがね。しかし君が素直に正体を明かしてくれないとなると……」

「俺は、ただの探偵だ！」

「探偵か、フン、どこを嗅ぎまわるにもいい身分じゃないか。スパイの身分にはもってこいだ」

「スパイ……」

「そうスパイ。君はスパイだ。問題は君がどこのスパイかということだ」

「俺はスパイじゃない」

「トカゲ」

ふたたびトカゲのパンチがみぞおちに入った。

「うっ、ううっ……」

「いいかげん素直になりたまえ、でないと君、終いには本当に霊柩車に乗ることになる」

「くそっ……あんたらは何者なんだ……」

「フフ、知りたいのかね。われわれ《新国家協会》のことを」

「ああ」

「われわれは新しい国家の設立を目的とした組織なのだ」

「新しい……国家!？」

「そう、一条寺くん、世界地図を思い浮かべてみたまえ。まだどこの国のものにもなっていない空白地帯があるだろう」

「知らんね。そんな場所」

「いや、知っているはずだ。ヒントは下のほうにある」

「下のほう……、南極か？」

「その通り」

「あんなところで生活できるのか？」

「観測隊の基地がある。われわれが必要としているのは言わば拠点でね。国民は世界中に散らばり自由のために闘っている戦士たちだ」

「よくわからないな」

「つまり、世界中の自由の戦士を支援するための基地を南極に作ろう、というわけだよ」

「その戦士と言うのは何と戦っているんだ？」

「資本家や、帝国主義者たちだ」

「うん、つまりそれは、テロリストの支援基地を南極に作るというようなことかな？」

「それは君の側からの見方だ。テロリストではなく自由の戦士だ」

「そんなことをして国連が黙ってないだろう」

「国連か。アメリカが、と言いたいのではないのかね。いずれにせよ恐れるには足らん相手だ。何しろわれわれには核兵器よりも強力な武器があるのだからな」

「何だ、その武器って？」

「君もご存知のはずだがね。例の《物体》だよ」

「何だそれは？」

「あの霊柩車の積荷だ。米軍は虎の子のオスプレイまで飛ばして追跡したらしいが、結局捕捉できなかった。だが君は知っているのだろう。ラングレンの行き先を」

「霊柩車の、積荷……」

「さあギヴ・アンド・テイクだよ、一条寺くん。君が情報を提供する番だ。言いたまえ、ビリー・ラングレンの潜伏場所を」

「知らないんだよ、本当に」

「君はあのビリー・ラングレンの過去をどの程度知っているのかね？」

「何も」

「あの男の経営している会社、データ・ジャック・ビリーのことは知っているだろう？」

「ああ、名前だけは聞いたが」

「データ・ジャック・ビリー、略称は DJB だ。この意味がわかるかね？」

「さあ」

「DJB をアルファベット順に一つずつ手前にずらしてみたまえ」

「ん、D の手前は C だろ、J の手前は……I か、B の手前は A……CIA!？」

「そう、あの男は元 CIA。データ・ジャック・ビリーは CIA の出先機関なのだ」

「いや、本当に CIA ならそんな名前は付けないだろ」

「CIA といっても下請けの非合法員だからな。まともな奴ではないのだ。ピンクの霊柩車を乗り回すような男だ」

「そんなものか？」

「彼は CIA を裏切った。そのせいで何人もの作業者が犠牲になったそうだよ。君もいくら忠義立てしても、いずれは裏切られるのが落ちだよ。だから言いたまえ、彼はどこにいるのだ？」

「だから、知らないんだって！」

「あくまでしらを切るのか？」

「知らないものは教えられないだろう」

「ならば仕方がない。トカゲ、あれを」

また殴られるのかと思い身構えたが、トカゲはどこかへ行ってティー・ワゴンのようなものを押してきた。その上には薬品の瓶と注射器が載せられていた。

「何をやる気だ？」

ドクター・イドは瓶の中の薬液を注射器に吸い上げた。

「私はがんらい暴力が嫌いなたちなのだ。これは自白剤だよ。どのみち君は洗いざらい白状することになる」

トカゲが手錠をはめられたままの私の腕をまくり袖を押さえた。ドクター・イドがご丁寧にも上腕部を脱脂綿で消毒してから、注射器の針を付きたてた。液体が注入されていく。

「さあ、数分で効き目があらわれてくるはずだ」腕時計を見ながらドクターは言った。「それまで何かお話でもしてほしいかな？」

「じゃあ教えてくれ、あんたがさっきから言ってる“物体”っていうのはいったい何なんだ？」

「なるほど君は知らされていないのだな」

「おれが何を知ってるかは、すぐにわかるだろうさ」

「うっ、うわああっ、たす、たすけてくれっ」

私は溶けたバターの中で溺れていた。沈んでいく先では、目のない巨大な山椒魚が口を開いて待ち構えていた。

「い、いかんん、こここれはああ、ばっどおおおとりいいいっぷ、だっ、だっ……だだ……
だっ……」

それから私は悪夢の世界にいた。

007 とキング・コングをごちゃ混ぜにしたシナリオをホドロフスキーが映画にしたような世界だった。だが夢は夢だ。いずれ醒める。

目を醒ますとそこは、淡いオレンジ色の光に包まれた空間だった。あまり広くはない。小型のユニット・バスぐらいの大きさだ。

手を伸ばそうとして、いまだ背で手錠につながれていることに気づいた。

感触からすると FRP でできたカプセルのようなものの内部らしかった。

たぶん給水タンクか何かだろう。よく見ると上部に出入りのためのハッチがあり、側面には給排水用のパイプを取り外した跡らしい穴があった。とりあえず酸欠の心配はなさそうだった。

穴から覗くと、椅子に座り、テーブルに足を載せて居眠りをしているトカゲの姿が見えた。あいかわらず廃工場の中にいるようだ。照明が煌々と焚かれていたが、窓の外は暗く、真夜中の気配だった。

私はタンクの底に身を横たえた。

眠くはなかった。かすかに頭が重かった。自白剤の副作用だろうか。

そう自白剤……。

私は何をしゃべったのだろう。

「バット・トリップだ」と喚くドクター・イドの声が記憶に残っていた。だから私はひどい幻覚を見ていたのだ。だとすると彼らはまともなことは何も聞き出せなかったにちがいない。いっそ薬の効力で私が何も知らないことがはっきりすればありがたかったのだが。

しばらくじっとしていた。

するとどこからか、鳥の鳴くような声が聞こえてきた。それにしても聞いたこともない奇妙な声だ。

それは「テケリ・リ！ テケリ・リ！」と聞こえた。

「トカゲっ、おい、トカゲ！」ドクター・イドが大声で叫んだ。「あれは何だっ、うわああああっ！」

覗き穴へ顔を寄せると、ドクター・イドが白目を剥いて倒れるのが見えた。

トカゲが何かに向けてブラックホークを発砲した。連射しながら顔が恐怖に歪んでいくのが見えた。

「ぎゃああっ……」

緑色の不定形の何かがトカゲに飛び掛った。ゼリー状の物質に顔を覆われもがいていたが、やがて倒れた。

床の上の緑色のゼリーは燐光を放ちながら縦に伸び上がると、特定の形を成し始めた。それは人間の形だった。

私はまだ幻覚のつづきを見ているらしい。

ゼリーは今や完全に人間の姿になっていた。裸の女だ。長い黒髪、かすかに緑がかった白い肌。それはあのピンクの霊柩車に乗っていた女だった。

女はタンクの方に近づいてきた。FRP を透かして、はしごを昇り、ハッチの部分に屈みこんでいるシルエットが見えた。

バチンという電撃の走る音とともに金属片が飛び散った。鍵を壊したのだろう。

ハッチが開き、女が顔を覗かせた。

「私の名はリラ＝ルウ。あなたにお願いがありました」

「や、やあ……、助けてくれるなら、何でもするよ……できることなら」

私はタンクから助け出され、手錠も外された。

「ふう、助かったよ。で、お願いって言うのは？」

「力を貸して欲しいのです。あの人を助けるために」

「あの人って？」

「ビリー・ラングレンです。彼は捕らえられているのです」

「君はいったい何者なんだ？」

「じつは、私は人間ではないのです……」

「ま、まあさうだろうね」

「でも私たちは愛し合っているのです」

「君と、ビリー・ラングレンが？」

「ええ、あの方は私を愛してると言った。でもそれは当然のことでもあるのです。なぜなら、あの方が私を研究所から盗み出したとき、私はあの方の精神を読み取ってあの方にとっての理想の女性の姿になったのだから」

「なるほど」

「最初、私は人間と愛し合うわけにはいかないと思って、あの方のもとから逃げました。でもあの方は追ってきてくれた。そのうちに私も彼の愛を拒めなくなってしまった。私たちはお互いに自分の種族について語り合いました。私たちは理解しあい、そして愛し合うことになったのです。でも、CIAの追跡から逃げ切ることはできず、私だけを逃がし彼は捕まってしまったのです」

「CIAか……。でも、君の能力があれば自分で助けられそうなものじゃないか？」

「いいえ、彼らはここの者たちとは違った力を持っているのです。CIAといっても、彼らを動かしているのは合衆国政府ではなく別のものの意思……」

「別のものって？」

「それを説明するのはむずかしい、今は行動しなければ」

「いいけど、俺は何をすればいいんだ？」

「あなたが囹になって、一時的に敵の気をそらして欲しいのです。その間に私があの方を助けます」

「囹ね。まあ、やるけど」

「行きましょう。彼らの車が使えらるわ」

リラ＝ルゥはトカゲの服から取ったキイをこちらへよこした。

「この二人は死んだのか？」

「いいえ、気絶しているだけ。当分眠っていることしょう」

「そうか」

他人の体に勝手に薬を打つような奴らなど、くたばりやがれだ。

トカゲが持っていたブラックホークを見ると、飴のように溶けて使い物にならなくなっていた。

「それから、君の服になるものを探さない」と

「私には無意味です」

「いや、こっちが気になるんだけど」

「そう、では……」

リラ＝ルゥは近くの機械にかけられていた銀色のビニールのカバーに触れた。するとカバーは細かい粒子状に分解し回転しながら彼女の体にまとわりつき、マントを羽織っている状態になった。大事な部分はあまり隠れていなかったが、全裸よりはましだろう。

われわれはベンツに乗り込んだ。

「ビリーはどこにいるんだ？」

「中央区新川にある立体駐車場の中」

「日本橋の方だな。しかしここはどこなんだ？」

とりあえず、工場から車を出し、しばらく走ると品川と大井町の間あたりであることがわかった。日本橋方面へ向かう。

「ところで君はなぜ俺がここにいることがわかったんだ？」

「私は人間の精神を探查することができる。ビリー・ラングレンの記憶の中の形と同じ形を探した」

「よくわからんが、テレパシーみたいなものかな」

「そう、私にもわからない」

「だけど、なんだってあの男は立体駐車場なんかにいるんだ。CIA に捕まってるんだろ？」

「その立体駐車場の十三階は、全体を CIA が所有していて、日本での工作に使う特殊車両の格納庫になっているのです」

「そんな場所があったのか」

車は銀座を抜け、八重洲通りにさしかかっていた。夜明けが近づき、空は妖しく輝いていた。人の姿はどこにも見えなかった。車もまばらで、それよりも鳥の数が異様に多かった。

一体これは現実なのだろうか。自白剤の副作用で幻覚を見続けているのではないか。今、助手席に座っているのは緑色のゼリー状の物質から変じた女なのだ。そんな女とともに CIA のアジトを強襲しようとしているのだ。

CIA などを敵に回して無事に済むものだろうか。

たぶん大丈夫だろう。何しろこの女リラ＝ルゥが、ドクター・イドが言うところの《物体》なのだとすれば、彼女は核兵器以上の戦力なのだから。いや、それより心配すべきなのは、行動を一つあやまれば、何かのはずみで首都圏全域が一瞬にして吹き飛んでしまいかねない、ということなのではないか……。

新川の立体駐車場は何の装飾もないグレーの直方体で、壁には水色で“P”の一文字が描かれていた。入口にはターン・テーブルと小さな詰め所があった。

「警備員がいるぞ」車を徐行させながら私は言った。

「このまま入って行って。私は少しの間なら、人の精神をコントロールできる」

「たいしたもんだ。そうか、ホテルに出入りしたときもその手を使ったんだな」

こちらを睨んで立ち上がりかけた警備員が突然、目の輝きを失い腰を下ろすと、操作盤の方へ向き合った。

車をエレベーターへ載せた。モーターが低く唸りを上げ、上昇し始めた。

「いったん十二階まで行くわ」リラ＝ルゥが言った。「それから私は非常階段を昇る。あなたはそのまま十三階へ上って、着いたらフロアへ出て。そのままじっとしていればいい。大丈夫、この車は普通より頑丈にできている。外へ出なければあなたは安全」

「防弾仕様か。たいしたもんだ」

「それからこれを」と彼女は手のひらの上にエメラルドのようなグリーンの小石を載せて差し出した。「それを身につけていて。敵の気を引き付けるためのものです」

「わかった」私は受け取った小石を胸のポケットに収めた。

リラ＝ルゥは十二階で車を降りると、非常階段の方へ音もなく走っていった。

エレベーターがふたたび上昇を始めた。

十三階に到着し、ゲートが開いた。私はゆっくりとベンツを前進させた。

フロアは明るく、様々な型のフォードやハマーが並んでいた。奥の半分ほどのスペースはパーティションで仕切られて見えなかった。

ベンツがエレベーターから出ると、待ち構えていたように銃を持った男が四人あらわれ、半円を描いて取り囲んだ。アジア系が二人と白人黒人が一人ずつ。四人とも同じ黒いコートを着て改造型 M16 のスコープに片目を押し付けてこちらを狙っていた。

私はベンツを停めた。今さらながら、この車が本当に防弾仕様なのか心配になってきた。

パーティションの一部が開き、さらに一人の男が姿を見せた。それはまるでパルプ雑誌の表紙でしか見かけない妖術使いのような人物だった。黒いマントで全身を覆い、目深に被ったフードのしたから見える口もとは蠟のように白く、皺深い老人のようだった。

妖術使いは、枯れ枝のような痩せ細った手を前方にかざし、何かをぶつぶつと呟きながら近づいてきた。そしてふと足を止めると、嘎れた声で叫んだ。

「It's a decoy. Fire! （それは罠だ。撃て!）」

四つの銃口が一斉に火を吹いた。

防弾ガラスが銃弾をはじき返した。

妖術使いは仕切りの奥へと駆け戻っていった。

防弾ガラスといえど、小口径の 5.56 ミリ弾といえど、フルオートで連射されれば、そう長くは持たない。蜘蛛の巣のようなひび割れが次第に広がっていった。

もうだめだ。そう思ったとき駐車スペースの奥で何かが爆発した。

パーティションが吹き飛び、妖術使いもいっしょに床に叩きつけられていた。

そこに置かれていたのはあのピンクの霊柩車だった。

霊柩車は青白い光に包まれながらゆっくりと前進し始めた。

銃を持った男たちは稲妻形の電光に撃たれ、つぎつぎと倒れていった。

妖術使いが立ち上がると、手をかざし呪文を叫んで、霊柩車の進行を止めようとした。だが、霊柩車から発する稲妻に撃たれつづけると、やがて力尽き、倒れて動かなくなった。

霊柩車が停止すると、あたりは静まり返ってもう動くものはなかった。

運転していたのはリラ＝ルゥだった。後方からビリー・ラングレンがふらつく足取りで姿を見せた。

私が近づいていくと「よお、また世話になったようだな」と彼は言った。

「だいじょうぶか？」

「ああ、薬で眠らされていただけだ」

フロントガラスの割れたベンツはその場に残し、われわれはピンクの霊柩車で地上に出た。

私は自分の事務所の近くまで送ってもらい、そこで彼らと別れることにした。

リラ＝ルゥは疲れたと言って冷凍庫で眠りについていった。

「いつか借りは返しに来るぜ」とビリーは言った。

「気にするな」私は言った。この男との再会など悪い予感しかしなかった。「それより、これからどうするんだ？」

「南極へ行く。リラ＝ルゥを故郷へ帰すんだ」

南極大陸の地下には未だ人類が知らない広大な空間があるのだと言う。

「CIA を操っていたネクロマンサーは死んだし、《新国家協会》もしばらくは立ち直れない。当分は追っ手

もかからないだろう。ま、のんびり行くさ」そう言って彼は去った。

南極……その厚い氷の下には、いったいどんな世界が隠されているのだろうか。

霊柩車にはキミが乗れ
<http://p.booklog.jp/book/61126>

著者：小倉蛇

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/snake-o/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/61126>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/61126>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ